

この先も、税と共に

那珂川市立那珂川南中学校 3年 三浦 由愛

「どこにいったの。」私は、心臓の激しい鼓動と冷や汗が止まらなかった。

ある年の夏祭りに家族で行った際に、まだ小さい妹が迷子になった。そこは、都会の街の中心部であり大規模な祭りが行われていたことから大勢の人が集まっていた。

当然のことながら、人混みの中で背の小さな妹を見つけられるはずもなく探し回っているうちに、時間は過ぎていった。

そこで、もしかしたらという思いにかけて最寄りの警察署に向かうと、なんとそこには妹がいた。妹が迷子になって一人でいたところを、祭りの警備に当たっていた警察官の方に保護され、警察署まで届けてもらったそうだ。おかげで妹と再会するまでに一時間もかからなかった。素早く保護してくださった警察官の方の対応に、心から感謝している。

私は、この出来事がきっかけで私たちの生活を守る機関に興味を湧いた。思い返せば、学校の授業で警察署や消防署の活動資金は税によって賄われていると学んだ覚えがある。税は他にも、ごみの回収、下水道の整備や、私達中学生の教育費など様々な物事に使われている。不平等が起こる可能性をできるだけ排除するためにも、国や地方自治体といった公的な組織が公平に活動資金を供給する必要があり、そのために税は使われているのだ。

私達の暮らしは、国民一人一人が納めている税に支えられ、守られて成り立っている。

これまで、私にとって税は「国のために払っているもの」という意識であまり身近なものだとは感じず、少し厄介だとまで思っていた。しかし、私の妹は納税という仕組みがあるから救われたのだ。税は私達が安全に、生き生きと過ごすためになくってはならないものなのだと実感することができた。厄介だ、なんて思えるはずもなくなった。

「税を納める」ということは、一人一人の未来へ「貯金をする」ということなのかもしれない。妹のように、いつ、どこで、どのように税に救われるかは予想がつかない。だからこそ、この貯金は必要不可欠だと思う。

「納税」は憲法によって定められている義務だ。しかし、納税を義務という意識で行っている人に、義務だからとは言わず自分が生きる社会を支える、自分が社会に加わるために必要なものだと気づいてほしい。また、税を納めている私達はただ税を納めるだけでなく、もっと税の使い道に興味を持ち、知っていくべきだと思う。そうして、暖かい気持ちで納税する人で溢れる輝かしい社会であってほしい。

今、私はどちらかというと税を納めてくださっている方々に支えられているが、将来、大人になったときには社会を担う立場として、胸を張って未来に貯金をしたい。

そして、これからもずっと、税が形を変えて届けている決して当たり前ではない幸せを忘れずに、未来へ繋いでいきたい。